



英文学を「実用」語学教材に：音読効果

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00005903 |

英文学を「実用」語学教材に～音読効果

堀江 珠喜

他者に言葉を教えるという行為——相手は当然ながら工業規格品ではなく、それぞれが異なった人格、才能や感情を持っている以上、こちら側も「機械」ではなく、「人間」としてのこまやかな対応能力が必要である。特に「受験テクニック」ではなく、人間として社会で使える言葉を学ばせるのは、あくまで「有機的」な作業なのだ。そこで無機質な装置にどれほどの効果が期待できるのか、私個人としては、正直なところ、はなはだ疑問である。

さて今回、拙論では「音読」の効果について考えたい。というのも過去1年間に、これに関して次のような体験があったためだ。(個人的体験で恐縮だが、机上の理論より実地体験を、私は尊重する。)

どのクラスでも一人の学生を立たせ、約1ページを読ませる。「自分だけのためにボソボソとではなく、皆に聞かせるつもりで読むように」と、学期初めに言い渡してあるのだが、なかなかそんな余裕のある学生は少ない。大学受験や検定試験には「音読」問題がないのだから、学んでこなかったのも当然だ。

しかし、語りかけるように読むのは、上手にしゃべるために有効な練習方法だと、私は信じている。学生に失望感を与えないよう、発音について(私が母校、神戸女学院で仕込まれたようには)うるさく矯正しないが、学外で恥をかかない程度には指導する。(原則として、私の授業中は日本語禁止なので、もちろん英語で教える。)

学生たちばかりではなく、ときには「見本」として私も読むのだが、複数の登場人物がおしゃべりするときには、それぞれの特徴をとらえて声やスピード、雰囲気を変え、地の文はきちんとナレーターとして読み分ける。それは私の楽しみでもあるし、なにより学生たちに、自分たちと私の読み方の違いを認識して欲しいのだ。

教材によってはテープやCD付だが、物語の場合、読み手が俳優や朗読のプロ級でないかぎり、ただ「ネイティブ」との資格だけでは、聞いていて味気ない出来映えのことが多い。また一般教室では音質や音響の問題もあり、できればマイクも用いず、肉声の方が伝達効果は高まる。(これは約30年の大学教師経験から、私自身が強く感じていることだ。)さらに、既製の聴覚教材とは異なり、私が読む場合、聞き手の能力に合わせて、スピードや区切りが調整できるというメリットもある。

ともかく2008年度英語BIで『くまのプーさん』を教材に用いたところ、授業後、いつも最前列に座っている熱心な留学生が、私にこう尋ねた。「先生は演劇の勉強をしていらしたのですか?」——つまり、そう彼女に感じさせる読み方だったのだ。残念ながら、私は、中学時代にESSの英語劇では端役の経験しかなかった。だが渡英のたびに、劇場へは行く。

また大学時代、英国演劇史の時間に、米人教授が感情をこめて『真面目が肝心』などの戯曲を読みながら、わかりにくい表現については(英語で)説明してくださる、という授業を受けていた。そういえば、文字だけではよくわからない雰囲気やユーモアなどが、教

授の音読によって理解できた——留学生の質問によってこの経験を思い出した私は、聞き手を意識した音読とともに、演劇を用いる教育方法に興味を抱くようになった。

それから数ヵ月後、米大統領選挙戦や就任の興奮は日本にも伝わり、CD付名演説集のような商品が、店頭に並ぶようになった。やっと日本でも（パワーポイントなどに頼らない）言葉のパワーによる説得力に気がつくかに思えたが、ブームはすぐに去った。

そもそもキング牧師が自らの暗殺を予感していたかのような、あの歴史的スピーチは、旧約聖書『出エジプト記』や『申命記』を知らなければ感動できないはずだ。本当に理解するには単なる英語力だけではなく、文化力も必要になる。しかるべき大学においては、いくら「実用英語」を教えるように言われても、陳腐な会話本ではなく、むしろ教養ある英米人と将来付き合えるレベルの文化力を語学力とともに授けるべく、「文学」を用いるべきではあるまいか。そこで会話の場面が多ければ、さらに良い。

もともと、大学入学まで受験英語といえど記号として解読していた者たちに、音読の効果や楽しさを認めさせるためには、私自身も多少の（英語）演劇レッスンを受ける必要がありそうだ。そう感じていたところ、2009年5月初め、大西洋航路でRADA（Royal Academy of Dramatic Art）によるシェイクスピア劇の観賞、演劇ワークショップと個人指導を受ける機会に恵まれた。

船上では、すべての舞台演技が（観客を退屈させないよう、また他の数あるイベントにも参加させられるよう）、1時間以内に終えなければならないので、『真夏の夜の夢』改題『ボトムスの夢』として、「シェイクスピア」を損なうことなく、コンパクトなコメディに仕上がっていた。セリフは（何しろシェイクスピアの言葉なので）全部を理解することはできなかったが、笑い所はちゃんとわかり、大変面白かった。

乗客2600人のうち英国人は約7割。もちろんその全員が観劇に来ているわけではないが、私以上に英語能力のある者ばかりであるのに、意外に笑い所で笑い声が少ないのが気になった。後日、RADAのメンバーにこの点を尋ねたところ、英国人は学校で行儀よく堅苦しい雰囲気シェイクスピアを学んできたので、この大戯曲家の名作に対し、笑い声を発することが恐れ多くてできないのだとか。従ってRADAのシェイクスピア劇を楽しむのは、むしろドイツ人客で、英国人客の多くは畏まって静かにしているか、あるいは初めから観に来ないらしい。

さてワークショップは3回あり、約40名が参加した。その最終回に7-8名ずつに分かれ、各グループに俳優1人が指導にあたり、シェイクスピアの戯曲から選ばれた約10行を読む練習をした。グループごとに作品は異なり、15分ほど後にそれぞれ皆の前で発表するのだ。

もちろん暗記は無理だから読み上げるのだが、その役割分担や立つ場所、多少の振り付けに工夫がうかがえて興味深い。

ちなみに我々のは『ロミオとジュリエット』の序で、ヴェローナ公を真中に、3人ずつがモンタギュー家とキャプレット家に分かれ、お互いを睨みつけるよう向かい合い、名門らしく威厳を持ち、胸を張り“Two households, both alike in dignity, in fair Verona, where we lay our scene”と言う。その続きの2行をヴェローナ公が読んだ後、両家に分かれていた（私の）夫と私が、あたかもロミオとジュリエットのように”From forth the fatal loins of these two foes”と言いながらゆっくり前進し、互いの右の手の平を合わそうとし、“A pair of star-cross'd

lovers take their life”で、見えない壁のために “palm to palm”とはゆかず、悲しそうに後退する。そして最後はグループ全員が一行になって、“whose misadventured piteous overthrows / Do with their death bury their parents’ strife” を読み終えた。

毎夜の社交ダンスで少しはスムーズな動作が身についていたのか、我々の”palm to palm”的な動作は、他の受講者たちに好評だった。ちなみに日本人は我々だけで、大部分は英語圏の出身である。

現代日本の大学では、いわゆる教養課程の英語科目で、敵対視されているのも同然のシェイクスピアだが、このワークショップのような機会を一度でも設けるのは、教養教育という意味において有効だと思うのだが、いかがだろうか。もちろん教師の確保はかなり困難だし、さらなる少人数のクラス編成が求められるが。

このワークショップ参加者の大部分は、前述の通り英語圏の出身者、しかも多くはイギリス人だが、「ネイティヴ」だからといって、皆が音読に優っているわけではない。なかには素人劇団所属らしき男性がいて、もう発声から異なっている。しかし彼とは対照的に、本物のイギリス人なのに、耳を疑うほど下手なシニア女性がいた。これも後日、RADA メンバーに尋ねたところ、何十年も人に聞かせるために読んだことがなかったとか。おそらく子どもが幼いときには童話を音読したが、その後、そのような機会がなかったのだろう。

我が国では 2001 年に齋藤孝著『声に出して読みたい日本語』がベストセラーになり、その直後からこれを真似たタイトルの本が続々刊行され、この流行は英語教材・英語実用書にも及んだ。『音読して楽しむ名作英文』『声に出して覚えたい英語』、『英語は pen を pen と声に出して覚えなさい』、『声に出して丸覚え英会話』というのまでであるが、「会話」なんてそもそも声に出すものだろうに。また『声に出して覚えるはじめての TOEIC Test トレーニングブック リスニング編』などというのまでである。いずれも、結局は声に出すことの重要性を認識したからこそその出版物と考えられよう。

だが、そもそもラジオが普及する以前の英文物語の多くは、英語圏内の中産階級家庭においては、1人が皆に読み聞かせるという用いられ方をしたのではなかったか。それは勉強ではなく、教養的娯楽であった。たとえば 1868 年出版『若草物語』では、ジョーが大声で本を読みながら編み物をしたり、彼女が読み聞かせ、姉妹が針仕事などをしながら耳を傾ける場面がある。

このような情景が日常茶飯であったなら、作家も、戯曲はもとより、それ以外の文学作品執筆においても、音読されることを意識したはずだ。さらに童話なら、いつの時代にも「子どもに読み聞かせる」ことを念頭に書かれているはずだ。オスカー・ワイルドの童話など、文字だけで見れば余分な装飾が多いが、声に出すと実に耳当たりがよい。また『幸福な王子』の冒頭部“High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince”の倒置法効果も、音読すればより理解できる。

もちろんこれらのことは、TOEIC などの得点とは無関係だが、美文を認める感覚が人生において無駄で無用とは、私には思えない。

ともかく、せっかく RADA と出会えたので、そのメンバーのうち 2 人から、2 度、英国戯曲の音読を個人指導してもらうことにした。

まずはシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』から、“Friends, Romans, Countrymen, lend

me your ears”で始まるアントニーの名演説だ。シーザーが暗殺され動揺するローマ市民を相手に、まずはブルータスが演説し、感激させる。民衆は”Let him be Caesar”とまでブルータスを誉めたたえるのだ。そこへアントニーが登場し、前述の呼びかけに続くスピーチで、政敵について”Brutus is an honourable man”と、4度「誉め殺し」をしながら、つまりブルータスを賛美する民衆に同調するようなふりをしながらも、シーザーの偉大さについて徐々に訴え、”O judgement! Thou art fled to brutish beasts”と、ブルータスの名に音の近い単語を用いて、巧妙に非難する。そして最後には、民衆の心を完全につかんでしまうのである。

そもそもブルータスのスピーチの冒頭部分”Romans, countrymen and lovers, hear me for my cause, and be silent that you may hear”とアントニーのを比べても、はるかに後者のほうが名調子なのは、声に出せばすぐにわかる。散文（前者）と（無韻詩ではあるが）韻文の効果にも差があるのだが、演説でも授業でも”be silent”と相手に言わなければならないのは、少々情けない——それだけ話し手にオーラが欠けているのである。もちろんブルータスの演説でも民衆の心をつかめたのだが、内容は素直だ。それにひきかえアントニーのは、本音を隠しながら政敵への誉め言葉を強調し、ついには民衆の心をつかんでしまうという、まさにタヌキ・オヤジ的レトリックである。この巧妙さを前にすると、オバマ大統領の演説など、まだまだ「初級」と感じずにはいられない——それでもシェイクスピアは、大学教育において不要なのだろうか？

さて個人レッスンでは”Friends, Romans, Countrymen lend me your ears”で、ざわめく民衆を自分に振り向けさせ、ブルータスを誉めながら皮肉を強め、シーザーへの哀悼の感情で民衆の共感を得ることに成功してスピーチを終えるまでの、複雑な箇所を読む。従って、一言一言を大事にしなければならないのは当然だ。俳優先生にアドヴァイスされたのは、「子音で意味を表し、母音で感情を表す」ということだ。

確かにイタリア・オペラなどを聞いても、感情は母音の部分で表されているが、歌手がイタリア人でなかったり、イタリア語が話せない場合、子音が不明瞭で、まったく意味不明になることが多い。母音と声量だけでごまかしているためだ。

それでもオペラは言葉がわからなくても、メロディで楽しめるが、演劇ではそうはゆかない。（たとえ意味がすべては理解できなくとも、計算して使われている言葉の響きや調子は伝わるはずだ。）ましてや現実生活において、感情や意味の通じない言葉など、「実用的」ではあるまい。

一般的に日本人は感情を込めて話すことに慣れていないので、「母音で感情」という指摘は、英文音読において、そしてもちろん英会話において役立つと思われる。

さて2回めのレッスンは、『真面目が肝心』から、私の好きな場面を二箇所選んだ。前述のようにこの戯曲は、私の大学時代に米人教授の朗読と説明が面白かった作品だが、後年には私自身がワイルド研究者となっても、最も気に入っているコメディである。すでに映像化されたものは3種類観たし、演劇は英国で実際に見る機会が何度もあった。1988年には、エイズ募金のために出演者全員が男性で観客の大部分がゲイというのも、ロンドンで楽しんだ。またニューヨークのオフ・ブロードウェイでミュージカル化されたのが、日本では宝塚歌劇によって演じられ、これは東京で見た。残念ながら翻訳では、原文の面白さは失われていたが、それを補うべく喜劇的工夫は見られた。ともかく、このくらい熱

心に、それまで私はこの作品を追いかけていたのだ。

ひとつめの場面では、グエンドレンに求婚したジョンが、彼女の母親、レディ・ブラックネルから数々の質問を浴びせかけられ、娘の夫として相応しいか否か、調べられる。レディ・ブラックネルの名セリフ“A hand-bag?”が発せられるところだ。

この劇は英国では学芸会などで上演されることも少なくないそうで、少々教養のある英国人なら“A hand-bag?”と聞いて、この場面を連想するはずなのだ。1987年のケン・ラッセル監督『サロメ』では、劇中劇の観客が、後ろの席でハンドバッグを探している客を見て、“A hand-bag?”と大仰に言ってクスッと笑う場面があり、これこそレディ・ブラックネルを気取ったに違いない。逆に言えば、このコメディの存在を知らなければ、ここでの“A hand-bag?”にこめられた場違いの意味がわからないのだ。

レディ・ブラックネルは結婚適齢期の娘を持つ母親だから、現在の私より少し若いくらいだ。イギリス貴族らしく気取っていて、無茶な要求をし、観客の笑い所をおさえながらも平然と話さなければならない。よく喜劇役者は悲劇役者より難しいと言われるが、そうだろう。悲劇は物語と状況で作りに上げられるが、コメディの笑いはタイミングが重要だ。しかし遊びであれ仕事であれ、ちょっとした冗談や笑いは、人間関係をなごやかにするので、劇のセリフがそのまま使えずとも、タイミングやユーモアの感覚を身につけるためには、このような音読も有効と思われる。

さて、次なる場面は、恋しいジョンが住む田舎の屋敷をグエンドレンが訪れ、彼が後見人となっている若い娘セシリーと会い、お互いが恋敵と勘違いして嫌味、皮肉から言い争いに発展するお茶の時間である。上流階級に属する女性らしく、表面上は相手を誉めながらも毒のある言葉を混ぜる。またセシリーがグエンドレンの紅茶に多量の砂糖を入れ、バター付きパンの代わりにケーキを渡してもめるのだ。

有名なセリフとしては、ロンドン育ちの令嬢グエンドレンが、田舎暮らしのセシリーを馬鹿にして言う“Sugar is not fashionable any more”が挙げられよう。かつては高価だった砂糖も庶民に普及し、上流階級はよりデリケートな味を求めるようになっていた。一幕めで大騒ぎすることになる「きゅうりのサンドイッチ」などは、その好例だろう。

その一幕めでは“All women become like their mothers”とあるが、グエンドレンの将来像こそがレディ・ブラックネルという感じだ。あくまでも貴族の娘らしく上品に、しかし敵対心を込めて、という状況は『プーさん』を音読するより、はるかに面白い。

こうして短期間ながらも RADA メンバーによるワークショップや個人指導を受け、少々自信をつけた私は、2009年度前後、それまで以上に授業中、自分の音読に力を入れた。教科書は、英語 A I で『メリー・ポピンズ』、B I で『鏡の国のアリス』——どちらも英文学の名作である。すると学期末に「4月からの授業で最も印象に残ったこと」を学生全員に書かせたところ、次のようなうれしい回答があった。(学生名については個人情報保護のためイニシャルのみ記す。)

私がとても印象に残ったのは、堀江先生の物語の朗読の仕方です。人物によって声を使い分けたり、セリフに感情をこめて読むのが本当に上手で、まさにその場面が目の前に浮かんでくるようでした。朗読の仕方によって、こんなにも物語の質が上がるんだなと感じ

ました。(A.U.)

音読だけで「その場面が目の前に浮かんでくる」ような気にすることができるなら、もはや映像やパワーポイントは不要だろう。かえってこのような機械は、視覚教材で学生の想像力や独創力を損ないかねまい。

さらにこの学生は、次のように自分の抱負を綴ってくれた——「今はまだまだ英語の発音の知識が無いので、読むだけで精一杯ですが、いつか私も、人を物語の中に引き込めるような英語の朗読ができるようになりたいと思います」。

「読むだけで精一杯」なのは、やはり中学・高校時代、受験のための英語学習が中心で、音読を楽しめるような文学的英語とは無縁で、またその喜びを教えてくれるような先生もいらっしやらなかったのだろう。進学対策で忙しく、味気ない英文ばかり読まされ、細かい文法や意味解釈で、どれほど英語嫌いや英語アレルギーを増やしていることか。

さて、R.N.も、次のように答えてくれた。

最も印象に残ったのは、先生の物語の読み方だ……今まで高校などで物語文の授業の時にも、先生たちでさえ、あまり変化をつけずにしていて、初めの時は、誰の言葉かなどが即座に判断できなかつたりしたので、先生の読み方はとても分かりやすかった。

K.A.も、「実際に声を出して英語を読むことの大切さ」に気がついてくれたし、R.N.は「先生が物語を読んでいるのと、学生が物語を読んでいるのとでは、話の内容のわかり方がとても違って、その点で印象に残った」と記している。私の質問はあくまで「授業中最も印象に残ったこと」であったが、音読について特定して尋ねたなら、異口同音にこのような感想が返ってきたものと思われる。もちろん授業中、居眠りしている学生は別だが。

「音読」で、美しい文学的英語に親しむことは、前述の斉藤孝著『声に出して読みたい日本語』にも共通する重要ポイントである。その本の「はじめに」でも「言葉の内容にあまりとらわれすぎずに、まずは日本語としての調子のよさや語感を楽しむとなじみが早くなると思います」とある。日本人である読者に対してすら、「言葉の内容にあまりとらわれすぎずに」と忠告しているのだ。ましてや外国語を学ぶのに、細かいことにとらわれず「調子のよさや語感を楽しむ」ことで、より「なじみが早くなる」のは当然だろう。さらに彼は「古文の教科書のようになってしまうと、少々面白味に欠けるので」と述べているが、英語においても同様だ。

しかし普遍的な人気を得てきた文学作品なら、教師の読み方により、学生も興味を抱き、その世界に引き込まれてゆくのだ。文学という教養にも触れ、将来、海外のエリートたちと交わっても恥をかかない程度に成長してくれるかもしれない。理系の学生の中にも、文学作品を原文で読む機会があったことを喜ぶ声は、毎年、聞かれるし、受験英語から解放され、私の授業で「英語が好きになっちゃいそう」と書いた学生もいる。「好きこそ物の上手なれ」だから、楽しい英語もあることを認識し、TOEICなどは就職や留学のために求められる点を取るためのものと分り切って欲しい。どうせ就職先も留学先も、その点数が実際の英語能力を表さないことくらい、わかっているのだ。なぜなら、TOEICには音読も speaking

もない——そしてこれらの能力こそ、私が授業で学生を英語好きにするために、そしてもちろん実用性をも考え、重視しているポイントなのだ。

音読と speaking については、当然ながら異なる能力が必要だ。後者には、よりコミュニケーション能力が求められる。しかしながら、音読は話す能力の向上に役立つ。というのも、まず聞き手に、よりわかりやすく音読するには、やはり多少のコミュニケーション能力が必要となるのだ。相手が聞き取れているか、面白がっているのかなど、「読み聞かせる」行為は、受験勉強中の長文読解とは違って、気を配らなければならない。

学期末頃になり、教科書を終えてしまったときなど、学生にはプリント教材を配らず（つまり学生にテキストを見せずに）私が、ラフカディオ・ハーンの怪談を読み聞かせることもある。そのようなときは、彼らの能力に合わせたスピードで、キーワードは特に強調し、彼らが知らない、あるいは聞き取り困難とおぼしき単語や表現については、そのつど読むのをやめ、(英語で) 意味を説明する。たぶん幼い子どもに本を読み聞かせる大人も、このように配慮し、相手にわからせるべく努力するはずなのだ。

つまりこのような行為においてもコミュニケーション能力が養われるはずなのだが、そこまで達しなくても、学生の音読の意義については、次のように考えられよう。

1. 内容を理解しながら読んでいるか、ただ字面を追って発音しているだけなのか、その句切り方や調子のつけ方によって、一般的に判断できる。(「一般的」と断ったのは、要領がよくて、意味もわからず巧みに読む者が、たまにいるのだ。)
2. 私自身は、英文専攻でもない大学生の発音矯正するのは、もはや時間とエネルギーの浪費と感じ、それよりも自信を持って話せるように指導している。(英文科なら、発音学なる講義で徹底的に矯正されるべきだ。) だが、スムーズに、上手に聞こえるように音読するには、やはり正しい発音が必要なのである。たとえば [n] は、日本語の「ん」ではない。正確に発音していれば Can I? の二語がなめらかに続くが、Can に「ん」を用いたら、言葉がブツ切り状態になる。
どうしても日本人は子音で終わる言葉をカタカナ式に母音を加えて発音するきらいがあるので、音は強すぎるし、次の言葉へとスムーズに移れなくなる。それでも通じるし、(TOEIC 得点にも関係ないので) 別にかまわないのだが、巧く読もうとすれば、物理的に正しい発音を身につけざるを得ない。
3. さらに登場人物が複数いる時には、それぞれの性格、年齢、立場や心理などを考えて、声色や調子を変える。この試みは、より巧みに英語を話すための有効な練習にもなる。

前述 RADA のワークショップ 2 回目では、参加者を「誇り高き上流階級」と「劣等感を抱いた労働者階級」の二グループに分け、全員を好き勝手に歩かせ、出会った相手に挨拶させた。「階級」を持ち込むのが、いかにも英国らしい。前者は胸を張って堂々と、時には相手を馬鹿にしたような表情で、そして後者はこそごと、少し前かがみになる。

あくまでこれは「芝居」であり、与えられた役割に合わせて、自分自身が俳優、脚本家、演出家を兼ねなければならないのだが、実生活においても、結局はその場で何をどのように言うか、自分が決め行動しなければならないのだ。

これが10分ほど続き、次には前者、つまり上流階級出身者が落ちぶれて人にサービスする仕事に就き、後者は成り上がってサービスを受ける身分になったという想定だ。同様に我々は、フロアを自在に動き、「給仕」となったが威厳を備えた前者が、急に豪華な環境に入って当惑する後者に”Would you like some tea, sir?”などと声をかける。すると、おどおどしながら下層階級出身者の客だか主人だかが返事をし、どう展開するかはそれぞれにまかされる。

感情豊かなアメリカ英語とは異なり、イギリス上流階級のしゃべり方は、冷静というか、「無表情」が特徴と教えられる。そういえばダイアナ妃事故死直後のエリザベス女王を描いた映画『クイーン』でも、女王は常に「公人」として自分の感情を抑えるよう教え込まれてきた旨のセリフがあった。

しかし「無表情」で静かな言葉でも、風格を感じさせなければなるまい。ただ単調なのではない。幸い私は上流階級出身者役であったので、それまでワイルドの風俗喜劇を見たり音読したりしていたことが役立った。

次の練習は、本来の自分とは異なった職業や境遇の人物になって、カクテルパーティへ出席し、出会った相手に自己紹介するというもの。性別までは変える必要がなかったので、私はノースカロライナ出身の（コメディによく出てくるような、セクシー系で知的レベルの低い）ファッション・モデルに決めた。この州名を選んだのは、これを発音する時に南部訛りが強調できるし、女性の南部訛りはフェミニンな感じがすると、以前アメリカ人から聞いていたからだ。（ちょうど京都言葉が女性的という印象を与えるのに似ている。）

実は私が神戸女学院中学で、最初に担当していただいたネイティブ教師は、南部出身のアイランド系、その名もミス・ケネディだった。従って私の英語には、もともと南部訛りが入っているのだ。もっとも、ワイルドを研究するのに、それでは申し訳ないので、イギリス英語を意識的に取り入れて使っているつもりだが。

この日のそれまでの人を馬鹿にしたような英国上流階級役とはがらりと変え、アメリカ南部出身の少々お馬鹿なモデル嬢として猫のような声色で、歩き方もセクシーに、人々と交わる。”Hello!”の一言から、その役割の雰囲気は伝わらなければならない。そして短いおしゃべりの後、私の場合は南部らしく”You all come and see me sometime”とゆっくり終えるようにした。

すでにある程度しゃべれる者なら、このような即興訓練もいいのだが、それまでの予備練習としては、やはり複数の特徴的な人物が登場する物語を、彼らになりきって音読するのが有効と思われる。

英文エッセイなどを、自分のために目読するのも、もちろん英語力向上にはいい。だが「話す」ためには、やはり声を出す、口を動かす練習は必要で、適切な音読が好ましい。特に日本国内で、ふだんから英語で話す相手が周囲にいない環境で、話すという実用英語を身につける一方法として音読、そしてまずその音読を楽しんで長続きさせるためにも、しかるべき文学作品が選ばれるべきなのである。